

坂折山の 玉んびようだぬき①

下末松 上村しづ



この物語は、上村さんが、地元に残された民話をもとに創り上げた創作民話です。今回より三回に分けてお届けします。ぜひお楽しみください。

これは土佐の国を山内のお殿様が治めていたころの話。

長岡郡長岡村の西南に、小高く長い年越山があった。年越山は二つの山から成っていて南側が坂折山、広い草原を間に挟んで北側には祈年山と続いている。

この坂折山の大きなくすのきの洞に、玉んびようというたぬきが妻めくと住んでいた。玉んびようは若く、毛並のつやも良く、目の周りは特にりっぱな黒いくまどりがあり体格、性質、賢さともに群を抜いていた。めぐはまるまるとして優しい目をしてたりこう者であった。

いつの間にか玉んびようは、年越山のためき仲間統領に推され信頼されていた。仲間坂折山、祈年山を併せた年越山で三十四ほどで、それぞれ自分の

『ほのぼのの広場』に、あなたの身の回りのほのぼのとした話題や我が家の自慢料理、読書の感想など、お気軽にご投稿ください。

▼投稿先 〒783 南国市大坪甲二三〇一 南国市役所内 広報委員会まで。

巣穴を持ち仲よく暮らしていた。

祈年山から谷口にかけてはいつも清水が流れ、さわがにや魚がおり山の中にはねずみ虫がたくさんいた。秋には柿など果物が実をつけ食べるものに不自由はなかった。

そのうえ、祈年山には、文武天皇の御代に五穀豊穡の神として全国十九社の一つに選ばれ、紀貫之ももうでられた祈年神社がある。長宗我部元親も毎年元旦に立派な刀を奉納されたそう

だ。そんな格式の高いお宮であるから参拝の人が多く、そのお供え物は優しい黒高神官がたぬきたちに残してくれるのであった。

近くに人家も少なく犬など恐しいものは来ず、お宮の山で狩りをする人はなかった。だからこの年越山のためきたちは穏やかな日々を送っていた。

ところが、どうしたわけか高知の浦戸のひたい白たぬきが家来になれと、玉んびように迫るようになった。たぬきは年を取ると額が白くなり知恵も術も抜群となる。ひたい白は浦戸一帯、長浜、五台山辺りを自分の手に治め、たぬき仲間では恐れられ

ていた。

玉んびようは悪いわきのあひたい白とつきあう気はなく、まして家来になど承服できることではない。いつも使いを追い払っていた。

ひたい白は玉んびようたちが偉いお宮のある年越山のおたぬき様と世間から言われているのがねたましかった。玉んびようを手下にすれば一段と偉くなると考えたので、あの手この手で玉んびように迫ってきたのである。

暑いお盆が過ぎたある日のこと、ひたい白からまた使いが来た。十月十五日に大津の関の道で大名行列比べをしよ

うと申し込んできた。いつも来るこびんすたぬきでなく、ひたい白の側近らしい。ひたい白が負けたら、もう家来になれと言わない。

玉んびようが負けたらひたい白の家来になれという条件であった。玉んびようはこれで決着をつけようと受け入れた。玉んびようは若者たぬきを集めこの話を伝え、全員力を合

わせてひたい白を負かそうと誓い合った。そして秋の彼岸が過ぎたある日、祈年山の上を一羽のはやぶさがゆっくり輪をかき山を越えていった。玉んびようである。めぐははやぶさが見えなくなるまで見送り、祈年様に

長い間手を合わせ、夫の無事を祈った。

翌朝めぐは若者たぬきを呼び集め、こんな大事なときに玉んびようがたちの悪い風邪を引き寝込んでしまったと伝え、皆がなばって大名行列比べまで病氣にならないようにしてくれと頼んだ。

（つづく）

